所属
学籍番号
S16（カナ表記）

日本大学の「ゼミ」における談話の分析

－対立関係と恐怖関係－

1. 初めに

日本の大学で行われる「ゼミ」形式の授業において、学生は、学術的、または就職の生活のために役立つ話法を意識しながら発言する。特に、丁寧さのレベルが存在する日本語には、言葉の丁寧さが会話の参加者間の関係を表す重要なポイントである。ゼミ形式の授業で学生及び先生は敬語を使いながら議論を行うというのが典型的なパターンである。しかし、その丁寧さは単なる人の感情を表すだけでなく、話者の意図も表しているのである。つまり、丁寧さは、話者がどのような気持ちで会話に参加しているかというのだけでなく、話者がどのような意図をもって、表現の使い方によってどのような効果を目指しているかも表すのである。

ところで、ゼミ形式の授業では、学生は自分の研究についてフィードバックをもらうこともあれば、フィードバックをすることもある。そして、時には間違えたことを指摘されたり、相手の間違いを指摘したりすることもある。特に後者の場合、会話の相手との関係を壊す可能性がある。人間は、自分のミスを指摘されることをよろしく思わないからである。

本研究では、話者が言葉の丁寧さをネガティブポライトネス・ストラテジーとして利用し、相手とどのような関係にあるかを表すシグナルを説明することを目標としている。ネガティブポライトネスストラテジーは、「…いわゆる丁寧さ、丁重さとして想起される…」のであり（三牧、2013 年）、相手と距離を置くために言葉遣いに気を付けながら、相手に対して批判的な発言をすることを意味している。しかし、言葉が丁寧であるとしても、その場で起きる状況が必ずしも安定しているわけではない。むしろ、ゼミは議論が中心であるから、意見の対立が起きるのが多いし、実はそれこそが求められている。したがって、本研究ではゼミにおける当事者間関係を、対立関係、恐怖関係、その二つに分けて分析を行う。つまり、話者が相手と対立的・恐怖的を作る意図で会話に参加しているということを表すシグナルが明らかにされるのである。

２． 先行研究

ウサミ(Usami, 2002)は Discourse Politeness in Japanes Conversation では、会話における敬語の使い方が会話の丁寧さとどのような関係にあるのかを説明している。分析の結果として、「話者による敬語、スーパー敬語の使い方は、相手との関係を表すというより、むしろ話者の個人的な特徴に強く影響されると指摘される。しかし、「…文章表現レベルでのグローバル・ディスコース分析において最も重要な発見とは、非丁寧形の使い方が話し手と聞き手の関係におけるパワーを表している」ということである。つまり、会話でパワーの強う方が非丁寧刑を使うことが多い。

それに対して Geyer は、会話の参加者が多数の場合、Face Threatening Acts（以下ＦＴ

Ａと称す）が会話の当事者間関係にどのように影響を及ぼしているかを議論している。会話の参加者が多数の場合、言語行動は、face-threatening でありながら、同時に face-enhancing でもある。特に、会話の参加者が多数である場合、collaborative disagreement が生じることが多い。Collaborative disagreement とは、二人以上の参加者が「反対のチーム」を作って、一定の言語行動への反応として FTA を行うことである。

以上の研究とは違い、本研究では、会話の参加者が一体どのような意図で表現を使い、相手と話しをするか、そしてその会話の当事者がその時どのような関係にあるかを説明することを目指す。本研究を行うことによって、特にネガティブポライトネスストラテジーをキーコンセプトとして、日本の大学のゼミ形式の授業で話者がどのような意図で発言を行い、相手からの発言をどのように意識しているかを説明するのである。

３．　研究の資料と分析の方法

本研究では、発表資料として、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話を文字化したものを使う。ひとつは（授業日）に授業で扱った、文字化された資料で、もう一つは、（授業日）の授業で扱った資料である。

分析枠組みは以下のとおりである。

①会話の参加者が対立関係にあるのは、批判を受けた側が相手からの批判を否定することは典型的ではあるが、他にも言葉や相づちを使いながら、相手の発言に介入したり、相手からの批判の根拠を否定するときに生じる。例えば、Ａさんは「...だから、仮説を見直した方が...」と言った時点で、それを受けたＢさんは「うん、でも...」でＡさんの発言に介入し、あるいは「...だから」の部分を否定することにより、Ａさんの論理が間違っていることを指摘するので、Ａさんのエゴに傷をつけるのである。したがって、本研究ではこの関係を対立関係と呼ぶことにする。

②会話の参加者は恐怖関係にあるのは、聞き手が話し手からの批判を受けたとき、声の大きさを小さくしたり、恐怖のため長い間返事をしなかったり、「はい」のような言葉でさえも使わずに、相手が話しているという状況に介入しない、質問された内容に対してはっきり答えられないときに、聞き手が自信を失い、相手との恐怖関係にある。

上記の定義に基づき、以下の通り分析を行う。

（授業日）の資料の分析

会話の参加者は発表者、質問者Ａ、質問者Ｂと先生である。

５ページの真ん中のところまで、発表者は相手からの指摘に対して、「はい。」や「はい、生かして」など、相手の発言に介入している。しかし、5 ページ真ん中から「先生」が話しをするとき、「発表者」一回も「はい」など、声を出さずに、相手からの指摘を受けた。そして、「先生」の指摘に対して、返事を「...んですけど」で終わり、自信がないことを示している。また、すぐそのあとに、質問者Ａが発言をするが、発表者は質問者Ａの発言に介

入し、その発言の最後の部分を自分で言ったということから、発表者は先生と恐怖関係にあるが、質問者Ａとは恐怖関係ではなく、対立関係にあることを表している。

（授業日）の資料の分析

役は発表者、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄである。

発表者はＡ、Ｂ、Ｃの発言に介入してはいるが、これら三者の批判に納得する表現で発表者が議論で負けていることを表している。その表現とは「そうですね」や「まだ具体的にあまり分析になっていないんですが」などが出てくる。しかし、それに対して、Ｄが発言をするとき、「聞きたいことは実は別々のもので、7 番は特に語彙についてに注目していますが、12 番は表現」という相手からの批判を否定する表現であり、発表者とＤが対立関係にあることを表している。しかし、今回の場合その関係が「これから」というところから、そして「これからの」、「分析がまだまだ」というふうに、発表者が議論で負けたことを意味するだけでなく、相手の批判に対して答えられないことも表しているので、発表者はＤと恐怖関係に入る転回点である。

４． 分析の結論

本研究では、ネガティブポライトネスストラテジーを使った話者の間でも、対立的・恐怖の関係が発生することを明らかにした。ネガティブポライトネスストラテジーは丁寧な言葉遣いで相手と距離を置き対立を避けることを目的としているが、実は必ずしもそうなるとは限らない。むしろ、日本の大学のゼミでは、対立関係と恐怖関係が普通に発生していることが分かった。しかし、最初に予測していたのと違い、これらの関係が静的ではなく、動態的なものであり、対立関係が恐怖関係に変わることが分かったので、逆に恐怖関係が対立関係に変わることもあると考えられる。大学のゼミが一体どのような状況で、そこにどのような力学が行われているかを説明する試みとして、本研究は言語分野および教育・育成分野の研究者に何らかの示唆を与えられれば幸いである。

参考文献

- 三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析 - 初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版。
- Naomi Geyer (2008) Discourse and Politeness, Continuum.
- Mayumi Usami (2002) Discourse Politeness in Japanese Conversation, Hituzi Syobo Publishing LTD.